

社会システム論参考資料

多摩大学2012年度講義用

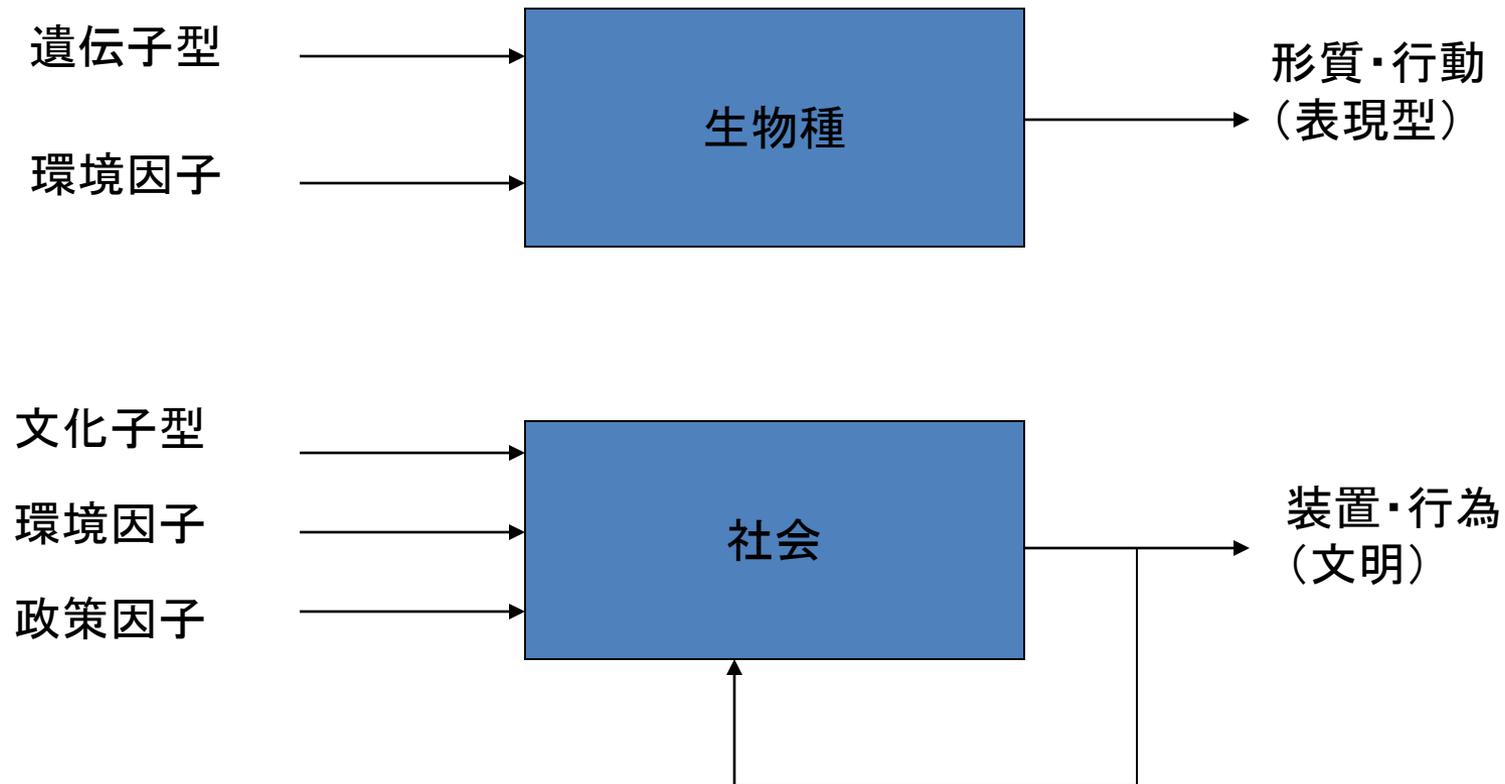
公文 俊平

2012年4月

社会システム論の基本的立場

- 「社会」を「システム」として見る立場
- 「社会」= {主体:文化、文明;環境}
- 「システム」=世界(対象・現象)を見る「レンズ」
世界を捉えるための「記号」「ことば」「メディア」
外部情報(パターン)を把握するための内部情報
– 世界を「知る」「動かす」「変える」のが狙い

生物と人間の比較



遺伝学の 最新状況

**nature
via
nurture**
Genes, Experience and
What Makes Us Human
MATT RIDLEY

やわらかな
遺伝子

マット・リドレー
中村桂子 斉藤隆央 訳 紀伊國屋書店

遺伝子は神でも、
運命でも、設計図でもなく、
時々刻々と環境から情報を引き出し、
しなやかに自己改造していく装置だった。

ゲム解読で見てきた新しい遺伝子観・人間観の誕生!!

紀伊國屋書店

社会システムの形

- システム（構造化された記号）の四つの基本形式
 - 存在・論理システム：「である」なにか
 - 定在・物理システム：「がある」「にある」なにか
 - 生体・生態システム：自・他分節、自己再生
 - 主体・社会システム：精神・肉体分節、世界構成

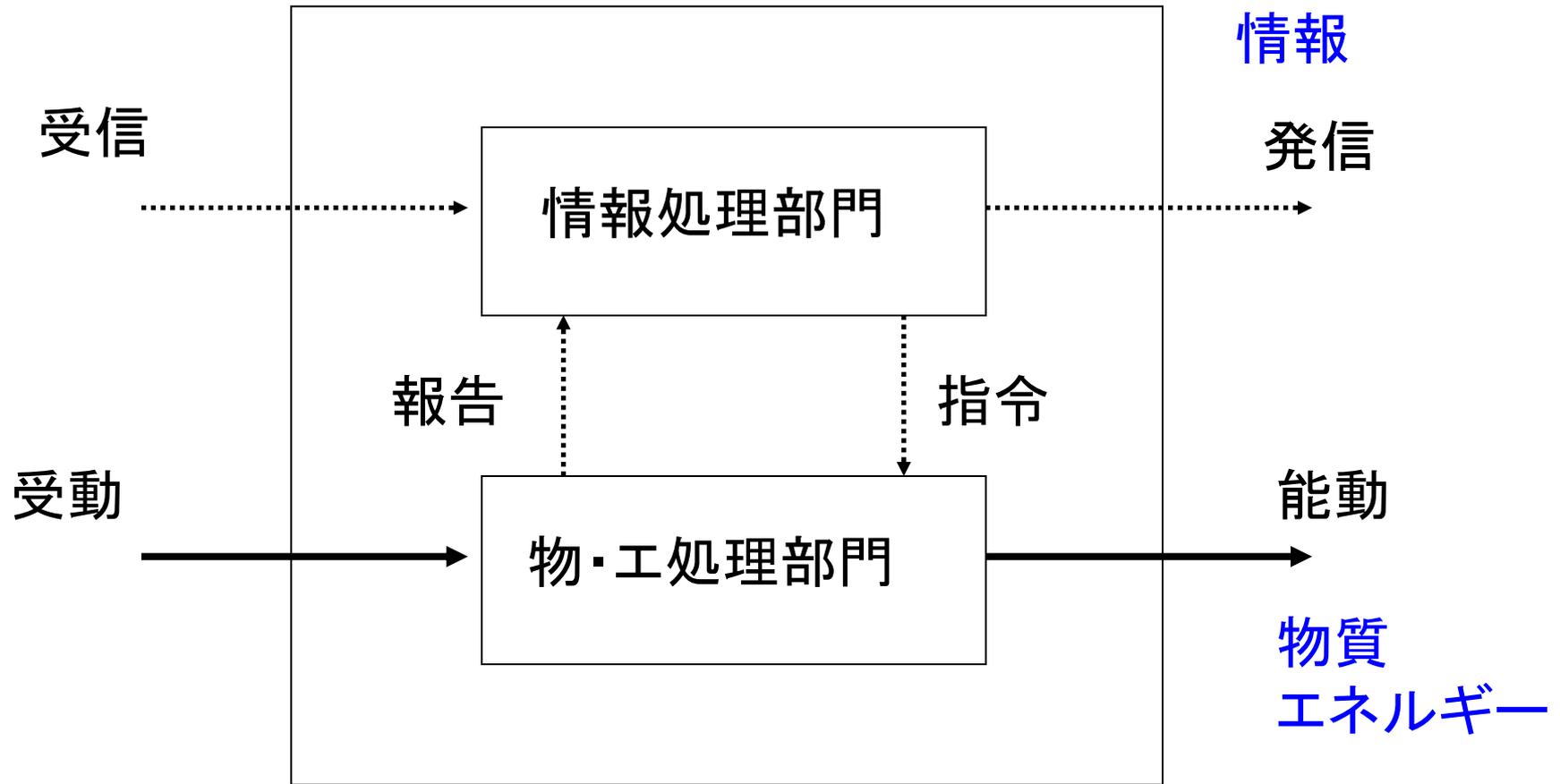
主体／社会システム

- 生体システムの特徴は自他分節
- 社会システムの場合、自他分節を行っている点は、生体／生態システムに同じ
- さらに、「自己」が、情報処理部門と物質・エネルギー処理部門（「精神」と「肉体」）に分かれている
 - 社会システム固有の二重性
- 単なる自己修復、再生能力を超えて、自分も含めた世界を認識し、世界に働きかけ、世界を作り変える能力を持つ

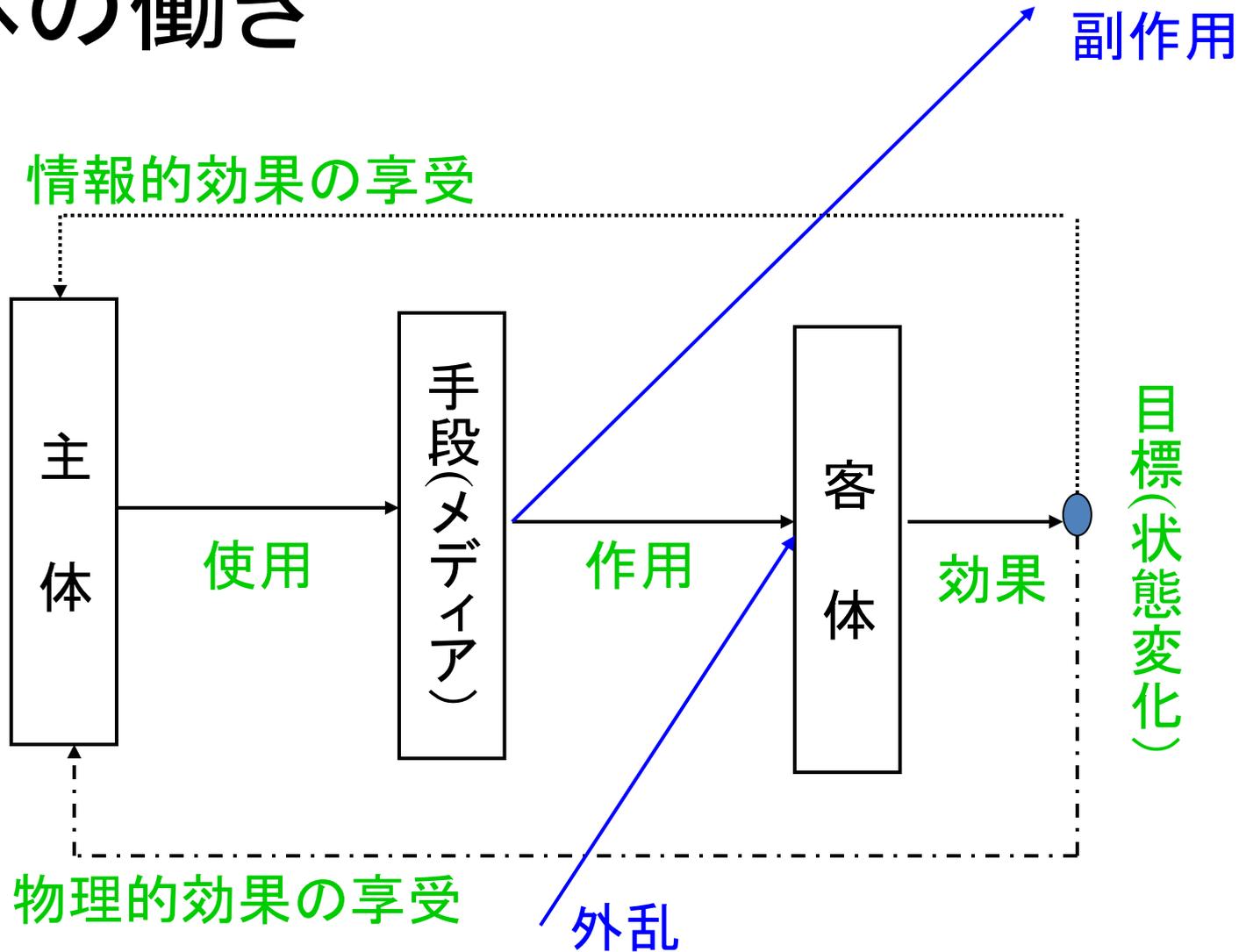
主体：社会システムの基本的構成要素

- 主体：外界→他者→自己の
認識能力をもつ行為体＝合理的行動体
- 行為：合理的行動＝目標実現のための手段
の使用とその結果の享受
- 手段：使用されることで作用を発揮する存在
(機械や他主体を含む)

主体の基本構造



主体の働き



主体の行為類型

- 経済行為：手段の制御をめざす
- 政治行為：他主体の制御をめざす
- 文化行為：意味・価値空間の通有をめざす
(広義には情報・知識の交流・通有)
(とりわけ「システム」とその解釈・評価の通有)
交流(コミュニケーション) 行為と呼ぶ方がよいかも

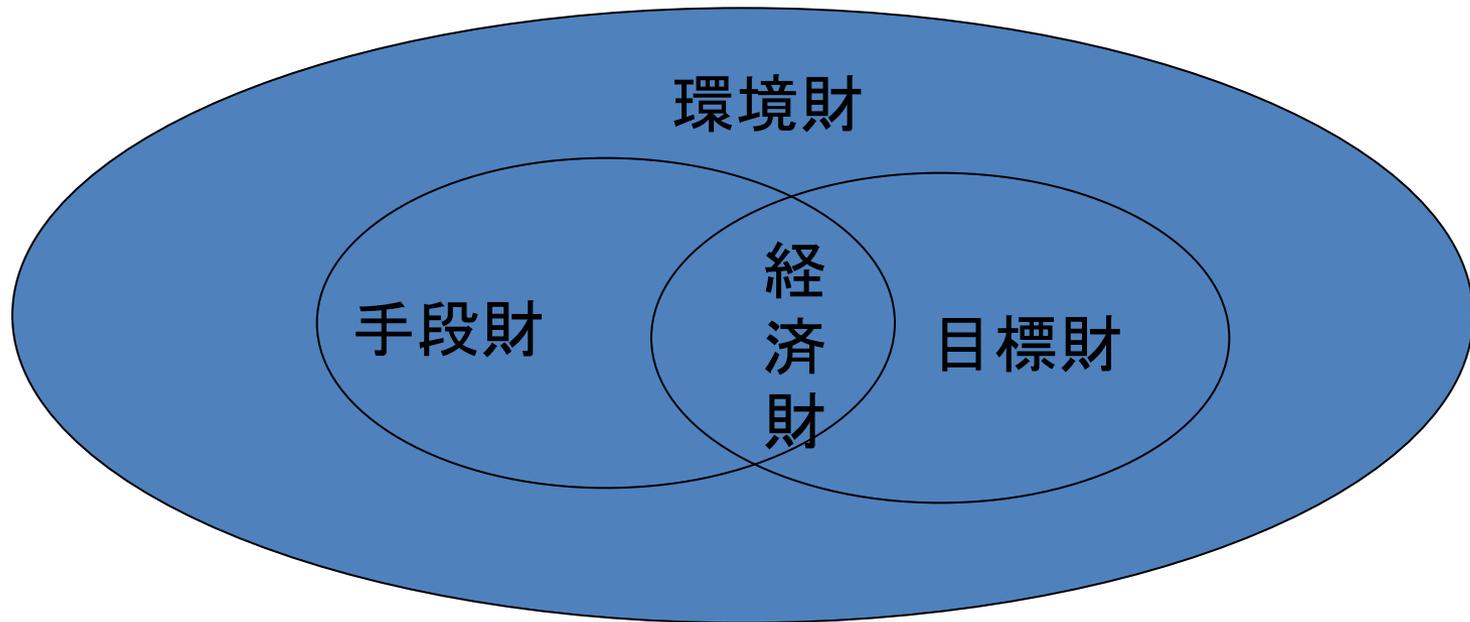
経済行為の基本型

- 使用と所有(使用権と所有権)
- 譲渡(所有権の)と貸与(使用権の)
- 代謝=(とくに自然との間での)入手と処分

財とサービス（ストックとフロー）

- 財の定義：主体がその状態に関心をもつ事物
- 財のタクソノミー：個別主体からみた
 - 目標財：その状態が変更可能
 - 手段財：使用が可能
 - 経済財：目標財かつ手段財
 - 環境財：作用のみを受ける財
- 注意：個々の財の“分類”は主体によって異なる
 - とりわけ、手段財か環境財かの認識
 - 例：世界の大気（中の炭酸ガス）

財の分類図：個別主体からみた



最大の環境財
は太陽

地球・大気は現在は人類の目標財

環境財

- 最大の環境財は太陽
- 近年の自覚：環境財の一部は目標財だった
 - 人類は環境財の状態を変えられることに気づいた
あるいは現に変えていることに気づいた
 - その最たるものが汚染や資源枯渇
 - 消極的環境財と共有地の悲劇
 - しかし、積極的に目標財とすることも可能
 - 積極的環境財化：低炭素社会の実現など

経済財の分類のもう一つの観点：集合財

- 共同使用（共通資源）：放牧地等
 - なかでも、使用可能水準が有限なもの：コモンズ
 - ただし各主体の使用水準はかならずしもひとしくない
 - 管理されない「コモンズ」の悲劇と
救命艇状況の倫理：協力は悪、良心は無意味
- 一様作用（共通環境財）：灯台、大気、安全、平和等
 - ただし、及ぶ作用の度合いは必ずしも等しくない
- 公共財：
 - 使用可能水準が無限大（競合不在）の共同使用財
 - 一様作用財（排除不能財）

経済学での標準的な財の分類図式

使用上の競合性と排除可能性を規準

		競合性	
		有	無
排除可能性	有	私的財	クラブ財
	無	コモンズ	公共財

排除「可能性」という言葉の曖昧性

財・サービス配分の基本型

- 再分配：納付と給付：国家化と共に拡大
- 交換：産業化と共に拡大
 - 双方向性、契約と合意
- 互酬：情報化と共に拡大
 - 一方向の連鎖

政治行為の基本型(1)

意図と結果による分類

相手状態 当方行為	改善	悪化
意図	協力	攻撃
結果	支援	敵対

政治行為の基本型(2)

- 結果の第三者的分類
 - 負和: 脅迫・強制型相互行為に多い
 - ゼロ和: 人為的ゲームに多い
 - 正和: 取引・搾取型相互行為の特徴

説得・誘導型相互行為の結果はどう特徴づけられ
ればよいだろうか？(搾取のない正和？)

政治行為の基本型(3)

- 一方的制御: 強制、搾取、誘導
 - 「太陽と北風」
- 交渉による制御: 脅迫、取引、説得
 - 脅迫: 要求をいれねば攻撃する(組織)
 - 取引: 要求をいれれば協力する(市場)
 - 説得: 要求をいれること自体が相手のため(智場=ネットワーク)

強制と脅迫、取引と搾取、説得と誘導は、互いにペアを作りがち

社会システム

社会システム=主体を要素とするシステム

- 複合主体:それ自体が主体であるような社会システム(生物でいえば有機体、生体):例:**主権国家、産業企業、情報産業**
 - 上位・下位・同位主体
- 非主体型システム(生物でいえば生態系):例:**国際社会、世界市場、地球智場**

主体間の“ゲーム”

- 主体が、互いに相手の出方(とる“戦略”)を考慮しつつ、最大の“利得”を獲得しようとして行う競争的行為。
- 利得行列: プレイヤーが互いにどんな戦略をとるかに応じて決まる利得の一覧
- 両者の利得の合計値に応じて、「ゼロ和」「非ゼロ和(正和、負和)」の別がある

主体が持つ三つのパワー ＝他主体の制御力

- 軍事力(脅迫・強制力):負和～零和
- 経済力(取引・搾取力):零和～正和
- 知力(説得・誘導力):正和

近代化の意味:継起的エンパワーメント

核主体のアクティビズムの発揮、社会ゲーム

軍事化⇒産業化⇒情報化

パワーの源泉

- **威：一般化された脅迫・強制力**
 - 具体的には土地・人民(領土):国軍化
- **富：一般化された取引・搾取力**
 - 具体的には財・サービス(商品):機械化
- **智：一般化された説得・誘導力**
 - 具体的には知識・情報(通識):デジタル化
- **権力:複合主体内で正統化された脅迫・強制力**
 - 具体的には身分と地位

社会ゲーム： 抽象的パワーの創造と配分のゲーム

- 社会科学はそれを研究する
- しかしこれまでは、
個々のパワーとゲームの個別研究
 - 統合の契機としてのゲームやシステムの一般理論
 - (国際)政治学と経済学の分立
 - →(情報)社会学の分立可能性も?

近代社会の三つの社会ゲーム

- 威のゲーム：国際社会で主権国家がプレー。
目標は威の増進と発揚
- 富のゲーム：世界市場で産業企業がプレー。
目標は富の蓄積と誇示
- 智のゲーム：地球智場で情報智業がプレー。
目標は智の獲得と発揮

権利と義務

- 権利: 社会システム内の他主体(とりわけ上位主体)から、ある状況下で、自由な実行が認められている行為
- 義務: 社会システム内の他主体(とりわけ上位主体)から、ある状況下で実行が要求されている行為

社会制度

制度：定型・標準化された知識・
行為・手段・システム

均衡して自分を存続させているゲーム

制度としての政治・経済・文化

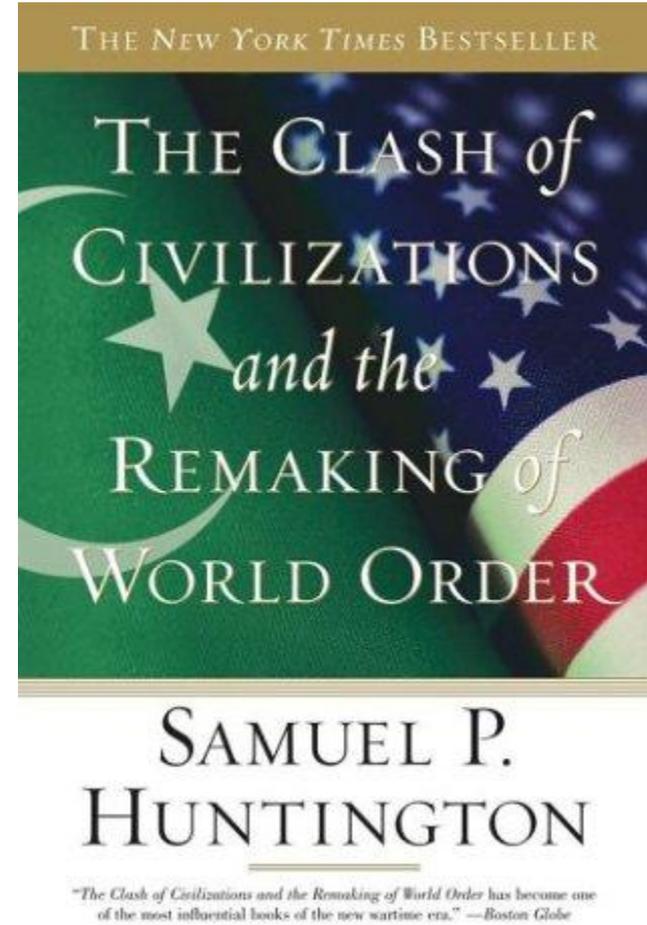
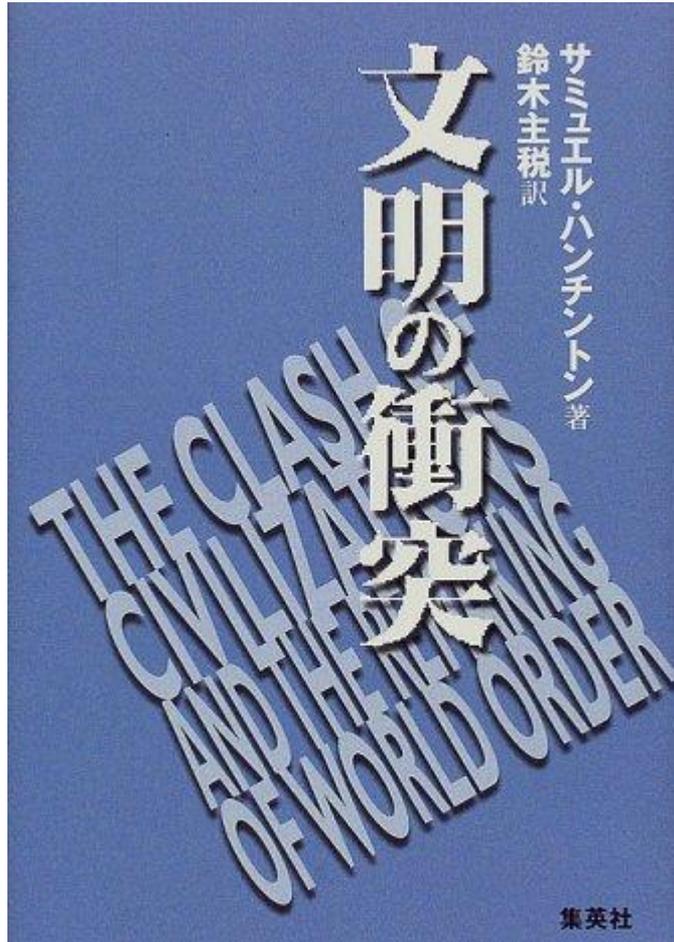
- －政治：他主体の制御＝行為の統制
- －経済：手段の制御（エコノミーの原義）
- －文化：情報の通有（事物の通有も）

現存文明の分類例

ハンチントン[98]の9文明区分

- 西欧
- ラテン・アメリカ
- イスラム
- 中国
- ヒンドゥー
- 東方正教会
- 仏教
- 日本
- アフリカ

ハンチントンの著書



上山春平の文明三段階論

(上山 62)

- 自然社会 → 農業社会 → 産業社会
 - 農業革命 (灌漑による穀物大量栽培)
→ 都市化、国家成立へ
 - 産業革命

文明の進化に関する通説

- トフラー的「第三の波」論
 - 前近代→近代→ポスト近代 の三分法
 - 農業社会→工業社会→第三の波社会
- ベルの「脱工業社会」論
 - 農業社会→工業社会→脱工業(知識)社会
- 情報「産業・社会・革命・化」論は60年代の日本から:梅棹、林、白根、香山、増田

伊東の「人類史の五大転換期」論 (伊東85、88)

200万年前の人類革命(道具＝旧石器)

1万年前の農業革命(新石器)

5000年前の都市革命(青銅器→鉄器)

2700－2400年前の精神革命(宗教)

(過去一万年間の最寒冷期:男性原理へ:安田p.76)

400年前の科学革命

伊東氏の専門は中東、長く比較文明学会会長

最新の人類学的知見：ヒトは皆アフリカから

- 600万年前：ヒト亜科の誕生（ホミニナエ、猿人）18種
 - 直立歩行
 - 頑丈型（100万年ごろ前までに絶滅）
 - 華奢型（250万年ごろ前までに絶滅）
- 250万年前：ヒト属が華奢型猿人の一種（ガルヒ？）から派生、8種、100－200万年前に第一次脱アフリカ→アジアへ
 - 石器、肉食、脳の拡大
- 20万年前：ホモ・サピエンスがホモ・ハイデルベルゲンシス（第二次脱アフリカを行なう）から派生。10万年前に中東→殴アへ
 - ヒト属の唯一の生き残り種：すべてアフリカの一女性の子孫
 - 9万年前、まず骨格器と石刃技法を開発
 - 文化的突破は6－4万年前：芸術、装身具、航海技術、長距離交易、構造的建造物、複雑な社会的行動
 - ネアンデルタール人もほぼ同時期にホモ・ハイデルベルゲンシスから派生、ヨーロッパ到達は先。そこから中東へも。ホモ・サピエンスとしばらく共存し、2－3万年前に絶滅

注意：ホモ・フローレシスエンシス

結論: ヒト = ホモ・サピエンス

- 人類文明としては、ホモ・サピエンス(新人)のそれを考えるのが適切(20万年前以降)
- とりわけ、10万年前のヨーロッパ・アジアへの移動以降(骨格器と石刃の開発)
- しかし、当時は旧人(ホモ・ネアンデルターレンシス)も共存
- 純粹の新人の時代は3-4万年前以降か
– つまり、後期旧石器時代以降

人類文明の形を決めるものは何か？ ——さまざまな学説

- 文明それ自体(制度的補完性): **社会科学**
- 文化(設計・運用原理): **文化論**
- 環境(自然、他社会): **環境論**
- 政策(全体～部分意思): **政治学、計画論**

私は「文化」をとくに重視したい

社会を観る二つの視点

「文明」と「文化」

- 文明: ヒトの集団が意識的につむぎ出す生活維持システム、人為的生活環境
- 文化: 文明を解釈・構築・運用するために「脳」が無意識的にもっている集合知的原理ものの見方・考え方(世界観・価値観)
(さらには各種のアイデア=ミーム)

文明と文化の例

- 文明：生活を支える仕組みや生活の型（外的環境）
 - 都市、建物、道路、乗り物...
 - 病院、学校、コンビニ、役所、会社...
 - 新聞、雑誌、テレビ、インターネット...
 - 思想、宗教、芸術、スポーツ...
 - 文の作り方、宛て名の書き方...
- 文化：文明を形作る原理（内的環境）：後述

文明の違いの背景には 文化の違いがある

- 例：宛て名の書き方や文の作り方
 - 「東洋」：全体から個別へ、総論から各論へ
 - 「西洋」：個別から全体へ、各論から総論へ
- 例：物事のあり方
 - 「西洋」：あれかこれか。対立・闘争とみる
 - 「東洋」：あれもこれも。調和・補完とみる

文化の特徴

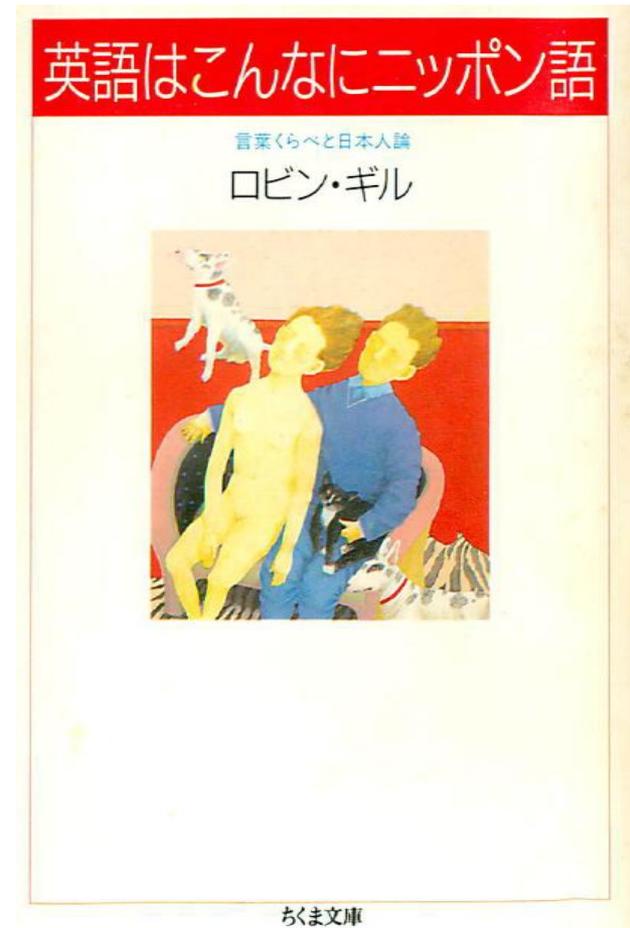
- ことばがないと理解できない現象
 - “甘え”
 - ガバナビリティ、アカウンタビリティ
- 希少だから価値を認める：“愛”“和”
- 反省してみないと気づかない
- 決心しただけでは変えられない

劣性文化子仮説

- 文化子にはさまざまな性格のものがあり、その中には、遺伝子における優性遺伝子と劣性遺伝子の関係にあるような文化子もある。
- 急激な環境変化(災害、戦争、技術変化、異文明との大々的接触)があると、それまでは優性文化子によって抑圧されていた、劣性文化子にかかわる意識や行動形が自由に発現しやすくなる。
- 例:日本の戦後の自由・民主主義の「はき違え」現象→極端な平等主義の発現
- 例:携帯電話の普及に伴うその特異な使い方:韓国の例とイタリアの例
- 近代の成熟局面での「和をなす文化」の優位

いきすぎた「文化」の一般化は危険

- 「日本人論」「日本文化論」の落とし穴
 - 二項対立的思考をしないといいつつそれにはまる
 - →「日本」と「西欧」(あるいは「中国」)を二項対立図式にいれて捉える



解毒剤

文化・文明のすれ違い現象

- 広義の文化摩擦
- 例：第一次大戦時のドイツ軍の軍歌「夜となく昼となく憎めイギリスを」を聞いた塹壕の中の英軍兵士が喜んでその歌を自分たちも歌ったケース
→ドイツ兵は困惑
- 例：横路もと北海道知事が米国を訪問して高校で講演した際に、ウィリアム・クラークの話をして、最後にBoys be ambitious!と励ました下りになると、たまりかねた高校生たちが爆笑したという話。

日本(西太平洋分枝の亜分枝)文化(1)

- アニミズム: 万物の主体的相互作用
 - 言語の受け身表現(死なれる、死んでやる)
- 順応重視(工学に対する応学): 自分を変える。自己主張は弱い
 - こととする、こととなる(次々となりゆく勢ひ)
 - 「そうですね、まあ、やっぱり」、頷きと相槌の会話
- 状態記述重視: 判断と情緒は最後に
 - 大から小へ(分析的)、三層構造文(象は鼻が長い)
- 互酬関係の重視
 - やる、あげる; もらう、くださる; いただく

日本(西太平洋分枝の亜分枝)文化(2)

- 自律分散重視: たこつぼ堀り→聖域作り
 - 職場・教室は働く者、教える者の聖域
- 準拠集団重視: 和と共働、競り合い型競争
 - 「うち」の概念、共働の階層構造、嫉妬の文化
- 他者への上からの配慮とケアを重視・要求
 - とくに政府や企業には母親型配慮を要求
 - 最年少者を規準とする集団内関係記述
 - おばあちゃん、お父さん、お姉さん、ボク
- 他に、抜け駆け否定、談合と棲み分け、「和」をたつとぶなど

付け足し: 哲学的反省

- 物自体(現実界) — — 仮象(想像界)
 - それを
理性が弁証法的に媒介・総合: 近代
(カント／ヘーゲルの理性主義的総合)
 - 象徴界(言語)が媒介(ラカン): 20世紀
 - 計算が創発的に結合(計算主義): 21世紀
- 文化(人間内在的組織原理)と文明(組織結果)を言語が媒介

付け足し：文化の例

- 意識の向き方(日本文化の場合):
 - 環境から自分へ(受け身)
 - 同質(総論)から異質(各論)へ、大から小へ
 - そして自分を変えることで対応:手段的対応主義
- ことばと対象との関係
 - ユダヤ・キリスト教:「初めにことばありき。ことばは神と共にありき。ことばは神なりき」
 - 日本教:「初めにひとびとありき。ひとびとは間柄とともにありき。ひとびとは人間なりき」

付け足し: 不足への特別な関心？

- 「愛」を強調するキリスト教を受け入れたヨーロッパ文化は愛が少ない？
- 「和をもって貴し」とする17条憲法を代々大切にしてきた日本文化には和が少ない？

文明と文化の分類手がかり

- 文明：三段階区分
 - 物的技術：採集・狩猟→農耕・牧畜→軍・産・情
 - 心的技術：呪術→宗教→「智識」
- 文化：二分法
 - 未来・発展志向～過去・存続志向
 - 対立・支配志向～調和・棲み分け志向

文明進化の三公理

- (1) 未来指向型の文化をもつ文明は物的技術の突破に成功する
- (2) 過去指向型の文化をもつ文明は心的技術の突破に成功する
- (3) 文明の交代は、発展の限界に達した既存文明の周辺に生ずる「文化革命」が契機となる(文明の限界は新文化で乗り越える)

定理：文明の六基本型と移行順序

- 物的技術突破型
 - (始代文明) → 古代文明 → 近代文明
- 心的技術突破型
 - 呪術文明 → 宗教文明 → (智識文明)
- (始代) → 呪術 → 古代 → 宗教 → 近代 → (智識)
20万年前 5万年前 1万年前 3千年前 1千年前

文明の仮分類図式

技		採・狩	農・牧	軍・産・情	
思					
智識				智識⇒	
宗教			宗教⇒	近代↑	
呪術		呪術⇒	古代↑		
	⇒	始代↑			

文明の進化系統図(1)

- 未来準拗型

始代文明

古代文明

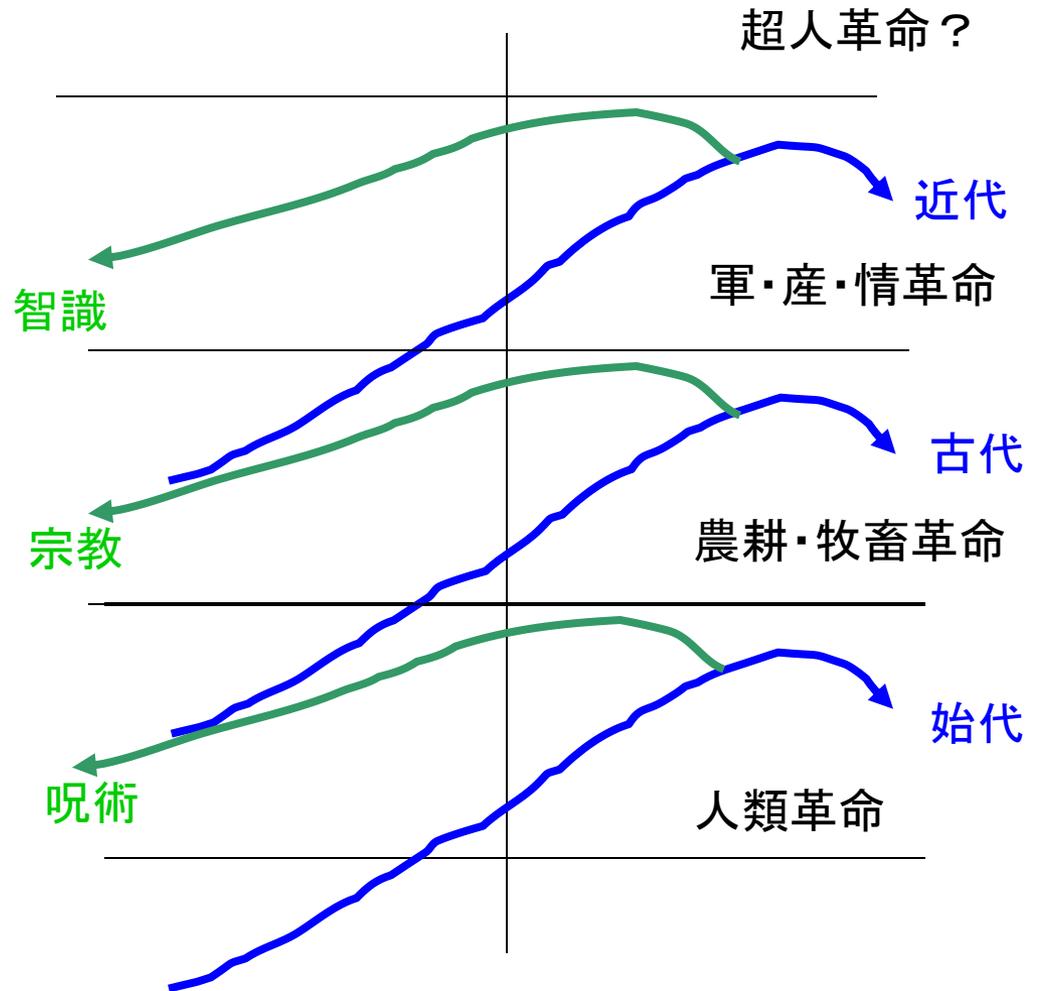
近代文明

- 過去準拗型

呪術文明

宗教文明

智識文明



文明の進化系統図(2)

智識

- 未来準拗型

始代文明

古代文明

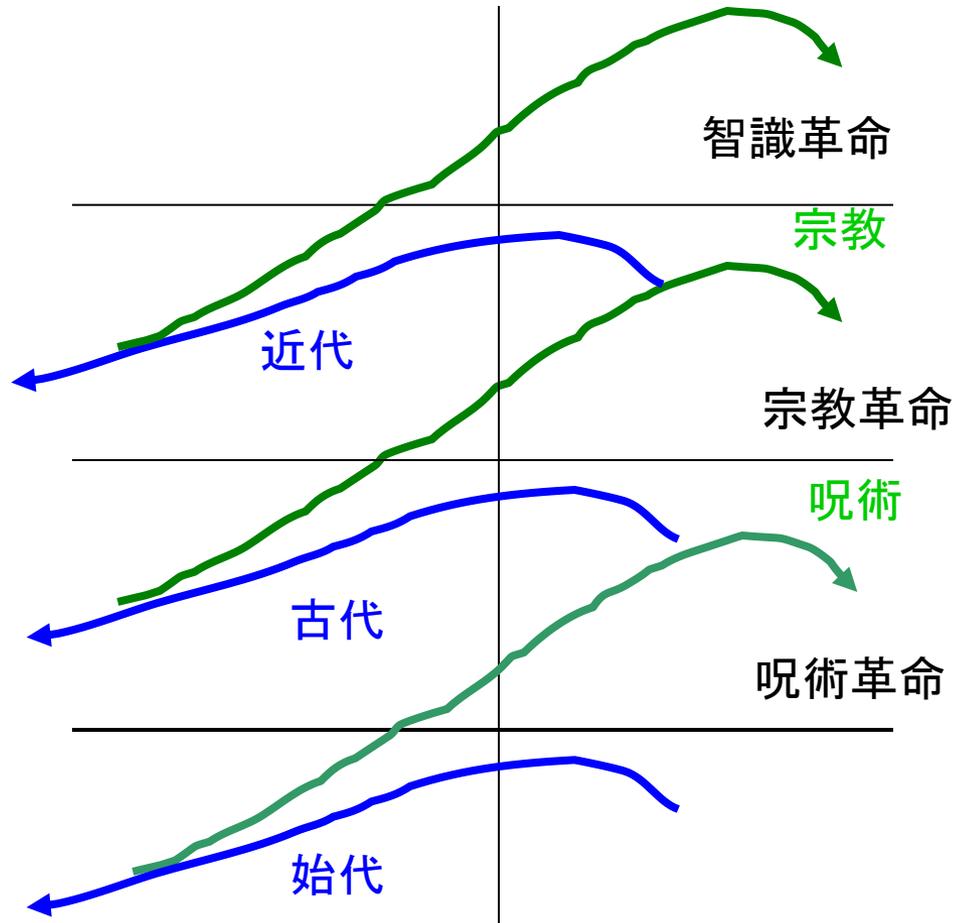
近代文明

- 過去準拗型

呪術文明

宗教文明

智識文明



ハンチントン分類との接合

- 宗教文明の5分肢
 - 道教(シナ)
 - ヒンドゥー(インド)
 - イスラム(中東、東南アジア)
 - 正教(スラブ)
 - 仏教(南アジア)
- 近代文明の3分肢
 - 東大西洋[西欧]
 - 西太平洋[日本]
 - 新大陸[西欧(米国)とラ米]

アフリカは呪術文明？

伊東の「五大転換期」論との接合

諸文明が行なった突破と解釈

- 10万年前の**人類革命** (石刃等) → 始代文明で
[3万年前の**呪術革命** → 呪術文明で]
1万年前の**農業革命** → 古代文明で
(5000年前の**都市革命** → 古代文明の一局面)
2700－2400年前の**精神革命** → 宗教文明で
400年前の**科学革命** → 近代文明で
[近未来の**新精神革命** → 智識文明で]

「近代文化」と「宗教文化」の比較

輝く**未来**

絶えず新しく

無限の進歩を

手段が大切

権力・金・知識

自由が進歩を生む

～

輝く**過去**

模範は過去に

復古こそ理想

～

目的が大切

真・善・美・正・義

～

規律が秩序を維持

宗教文明の典型的言説

- 西欧近代文明の生み出した文物のもとはすべて中国にあった

「近年ヨーロッパで盛行の新文化と話題の無政府主義と共産主義は、すべて我々中国に何千年も前からあった旧物である。」 孫文

近代文明の典型的言説

知識や技術なら時代とともに蓄積していきます。私はニュートンの解けなかった数学の問題を、鼻をほじくりながらあっという間に解いてしまいます。これはもちろん、私の方が頭が良いからじゃありません。私が数学的知識でニュートンを圧倒しているからです。

藤原正彦『国家の品格』、154ページ

近代文化と近代文明制度

- 近代的文化
 - 人間中心的進歩主義
 - 手段的能動主義
 - 分権的自由主義
- 近代的文明制度
 - 国民国家
 - 産業企業
 - 新主体としての情報智業
 - NGO-NPO-CSOs

ギデنز:80年代:
近代化徹底論

現代世界の二大文明圏

- 過去・規律準拠型の「宗教文明」
 - 道教(シナ)、仏教(南アジア)、ヒンズー教(インド)、イスラム教(オリエント)、キリスト正教(スラブ)
 - 伝統の維持と復古が最大の価値
- 未来・自由志向型の「近代文明」
 - 西・東欧、新大陸、東・東南アジア
 - 力(手段)の不断の進歩が最大の価値

現代世界の二大文明地域

梅棹の「文明の生態史観」

ユーラシア大陸

第一地域：近代文明
日本、西欧、アメリカ

第二地域：宗教文明

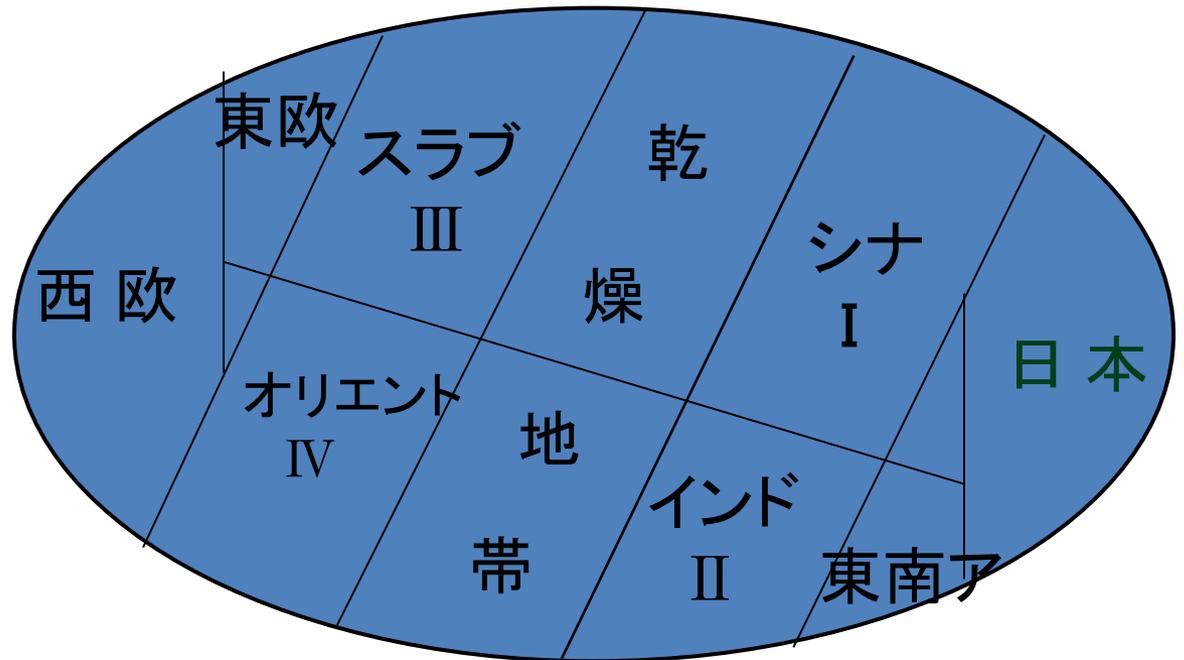
I：道教（シナ）

II：ヒンドゥー（インド）

III：基督正教（スラブ）

IV：イスラム（オリエント）

V：仏教（南アジア）



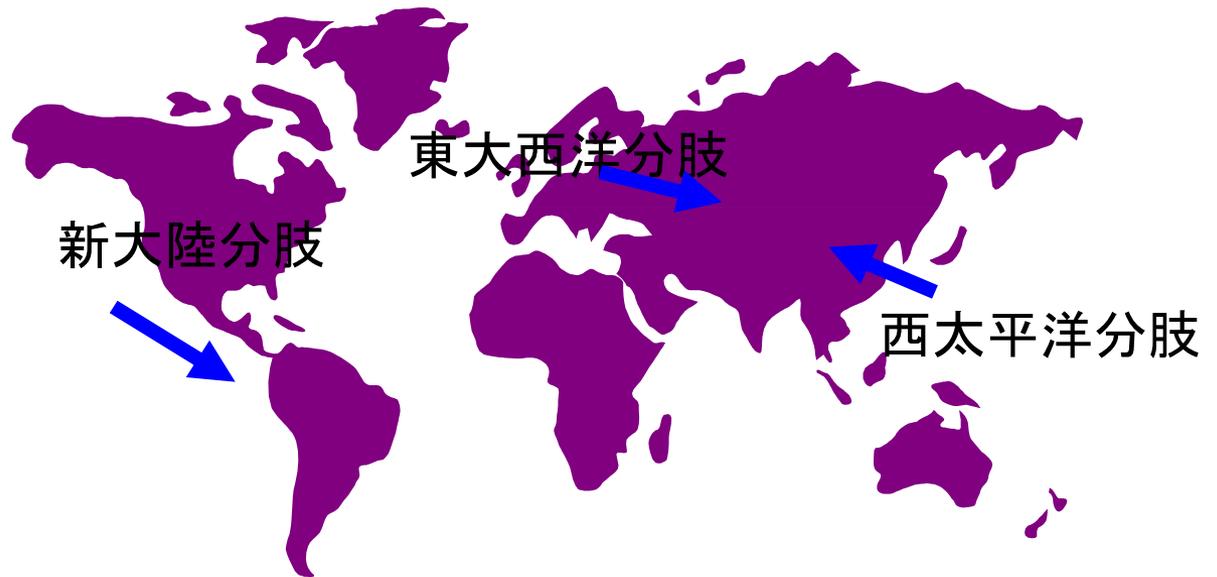
梅棹：「文明の生態史観」

近代文明の三つの大枝

◇ 東大西洋

◇ 新大陸

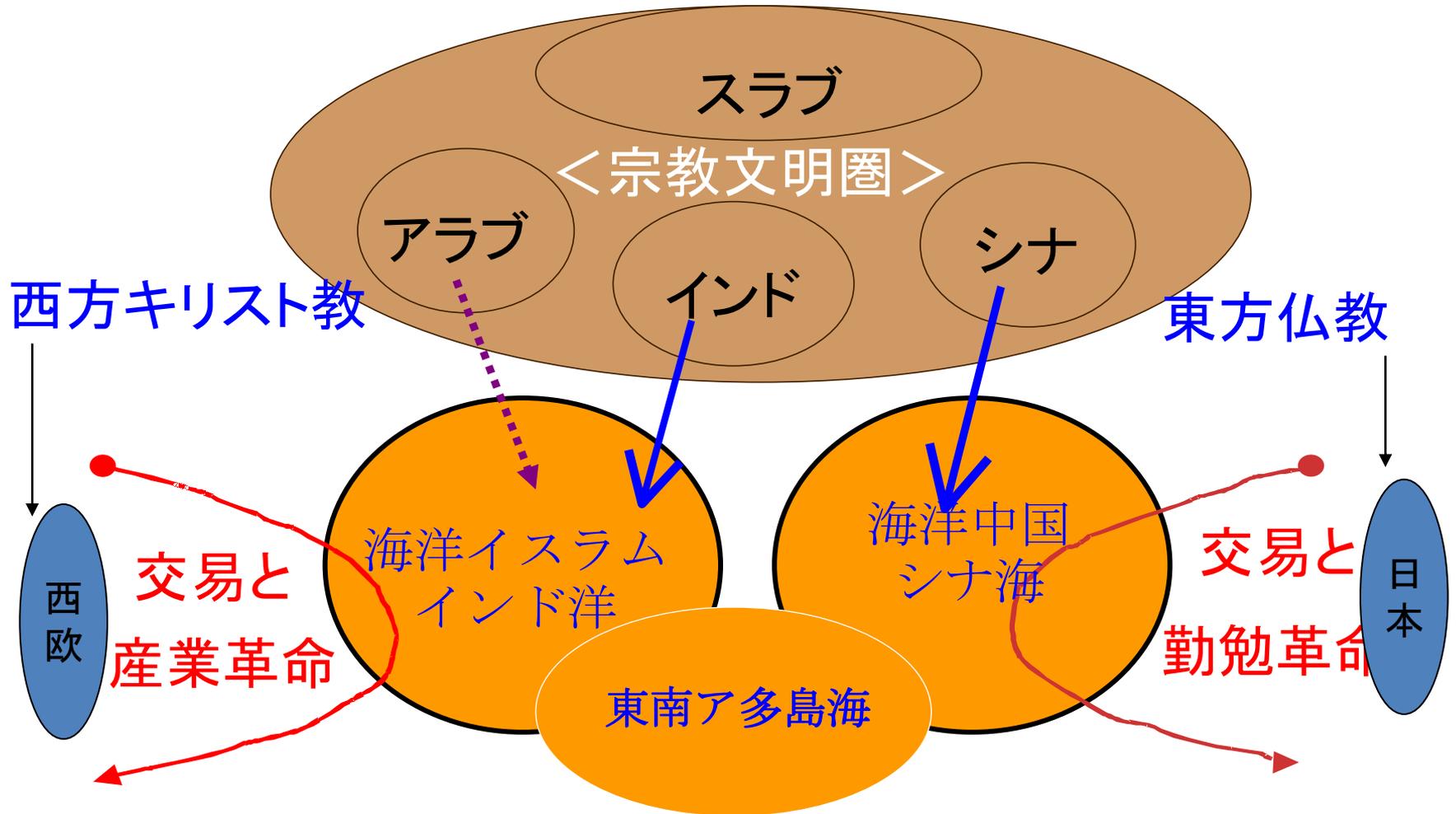
◇ 西太平洋



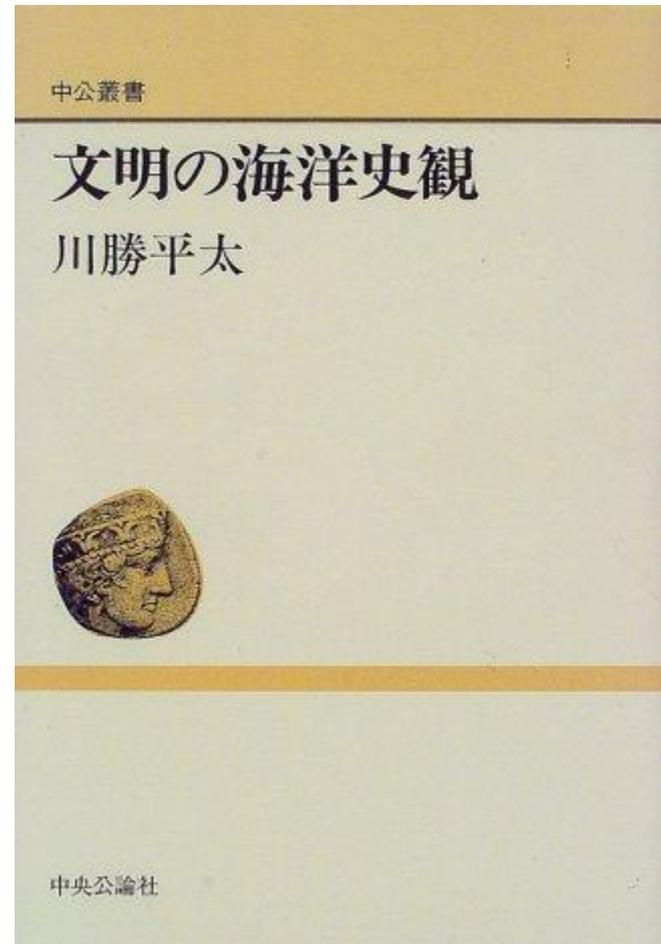
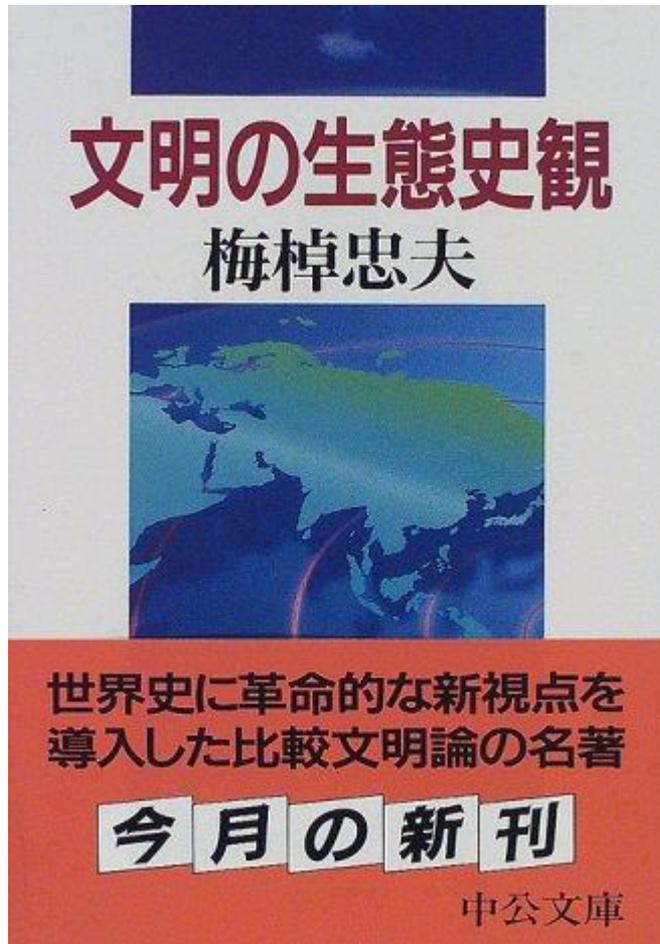
近代文明の伝播と成熟：中南米へ、ユーラシアへ
取り残されるアフリカ

川勝の海洋文明史観

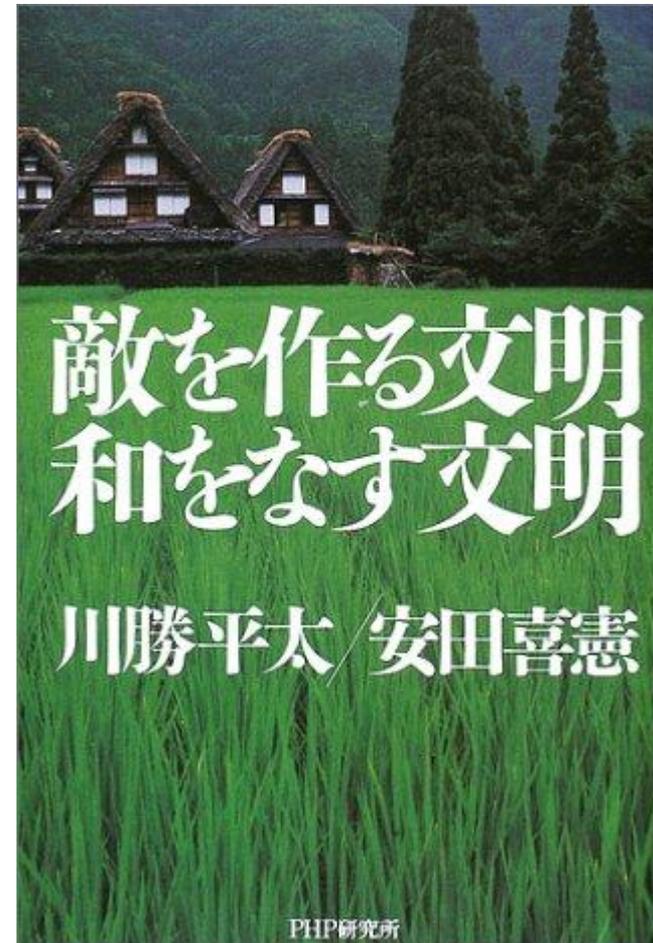
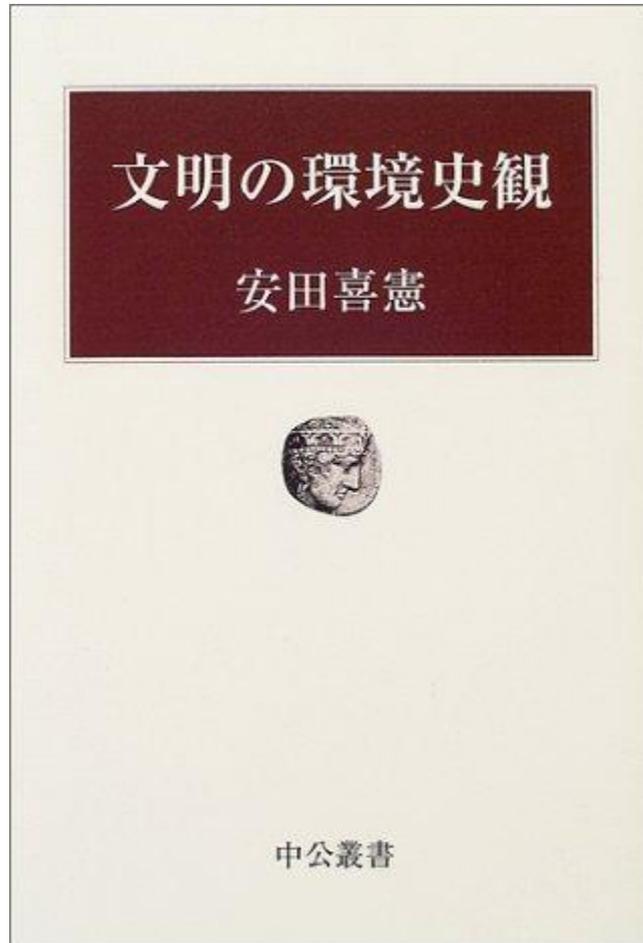
＜近代文明の誕生＞



梅棹・川勝の文明論



安田・川勝の文明論



梅棹の近代文明論

- 「文明」＝「生活様式」
- 「高度の文明」＝「近代文明」＝「高度の近代文明」（つまり、近・現代の普遍文明）
- 自生したのは「封建制」をもった二地域
 - 第一地域の西欧と日本
- 伝播していくのは、第二地域（宗教文明）
 - 20世紀（後半）は第二地域が近代化する時代

梅棹仮説の拡大

- 封建化＝権力の分散・分権化
 - 宗教権力：世界教会
 - 世俗権力：世界帝国
- この意味での「封建化」は近代の**形成局面**
- 封建化は西欧以外にもあった
 - 日本→近代文明としてのイエ社会論[村上／佐藤／公文]
 - 中国→宋から明末・清初(宗族の経営体化)[溝口]
 - さらに、ロシア、インド、南・東南アジアにも？
- 分権化した地域権力の集権化＝近代の**出現局面**

「近代化」をみなおす

- 古代帝国の辺境で、諸集団(とそれを構成する個人)が自立してローカルな権力・市場とそれを支える自我意識を生みだし、それがグローバルに拡大して世界システムと市民意識を生みだしていくプロセスのこと。
- したがって、その出発点は、ウォーラーステインのいう「世界システム」の形成よりもずっと古い。いわゆる「封建化」や「ルネサンス・宗教革命」がそれだ。
- しかもそのようなローカル権力・自意識の形成はヨーロッパだけに限られない。中国、日本、アラブ等にもひとしくみられた。

基本視点の拡張：広義の近代化論

（梅棹文明史観の拡張）

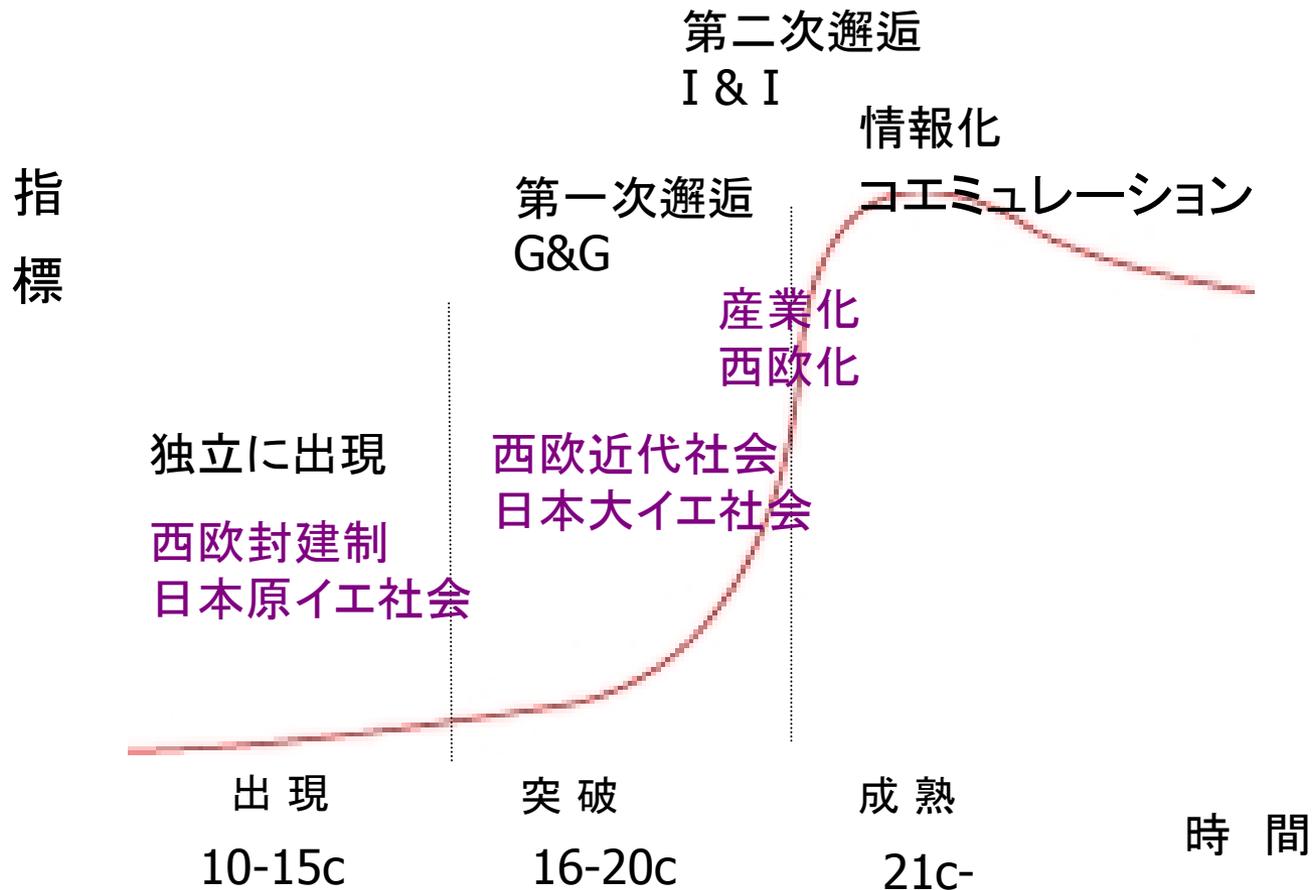
- 「封建化」は近代化の「形成・出現」局面にあたる
 - 広義の近代化の三局面論が可能に
 - 出現：10世紀～：封建化（国家化）：競争的淘汰過程
 - 突破：15世紀～：産業化（資本主義化）：西欧優位
 - 成熟：20世紀～：情報化：新しい可能性
- 「西欧的近代化」は広義の近代化の「突破局面」にあたる
- 日欧は邂逅しつつ並行的に近代化した
 - 第一次邂逅：16世紀：三つのG→棄却 日本もGoldにも注意
 - 第二次邂逅：19世紀：三つのI→棄却？
- そして日欧のコエミュレーションを通じた成熟から「近代の超克」=ポストモダンへ

分枝ごとに異なる特殊近代文化 (当然、文明の形に影響)

- 西欧文化: 他者否定(征服・支配)に向う能動主義
 - 一元論、因果論、二項対立
 - 個人主義、自由主義、工学
- 日本文化: 自己否定(適応・一体化)に向う能動主義
 - 多元論、相関論、棲み分け
 - 個イエ主義、間人主義、応学
- 中国文化: 関係維持に向う能動主義？
 - 徳治、均分
 - 宗族／秘密結社中心主義

日欧は並行的に近代化した

拡張梅棹理論(梅棹・川勝・公文)

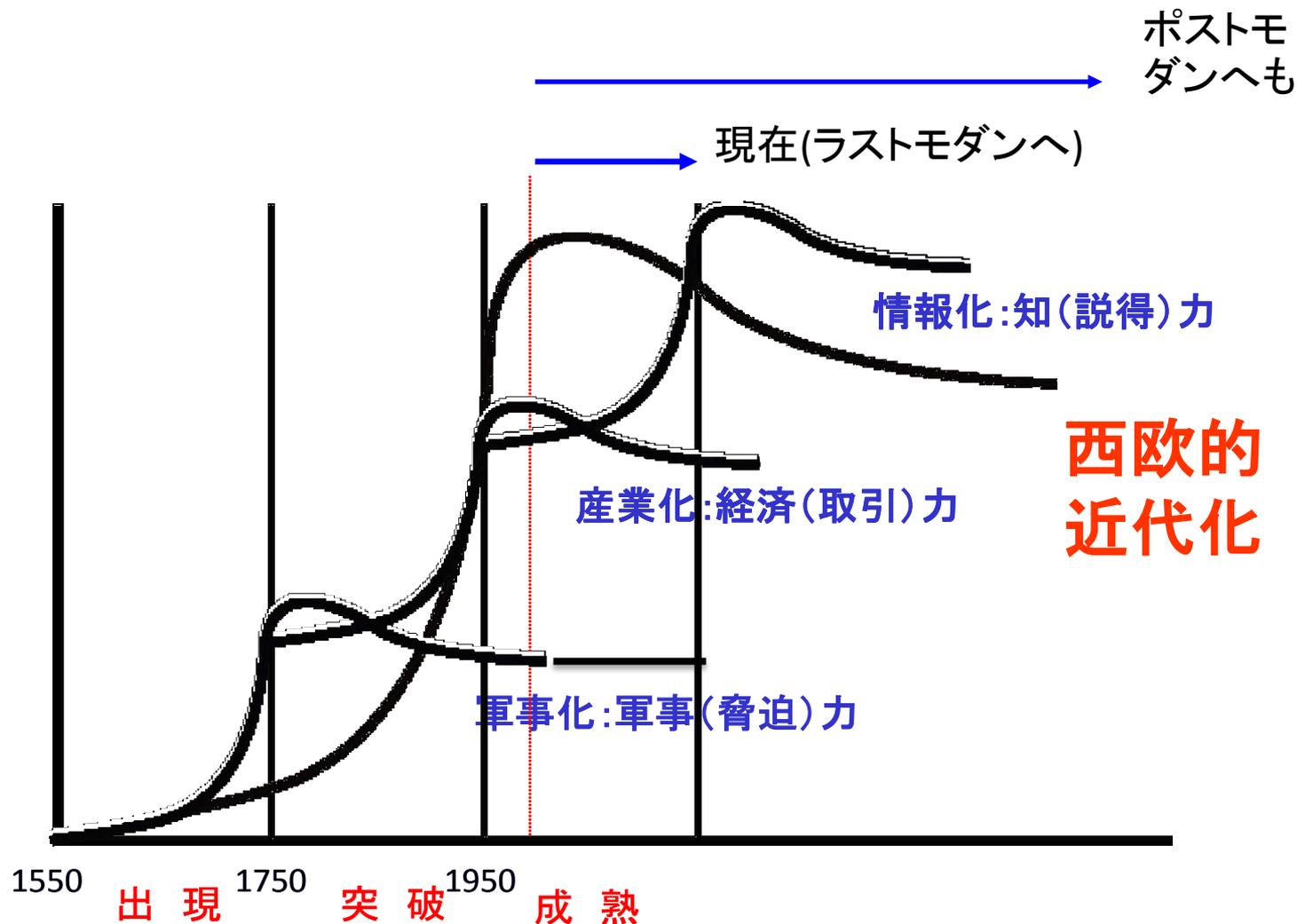


私の文明論の基本視点 「三つの波」を近代化の中に見る

- 近代化＝軍事化→産業化→情報化
 - (狭義の)近代化の三局面論
 - 16世紀～軍国社会として出現
 - 18世紀～産業社会として突破
 - 20世紀～情報社会として成熟
- 情報社会はラストモダン(近代の成熟)社会
 - 局面重複の可能性: 同時並行的進展
 - 産業化の成熟＝第三次産業革命 は
 - 情報化の出現＝第一次情報革命 と並行

狭義(=西欧型)の近代化の三局面

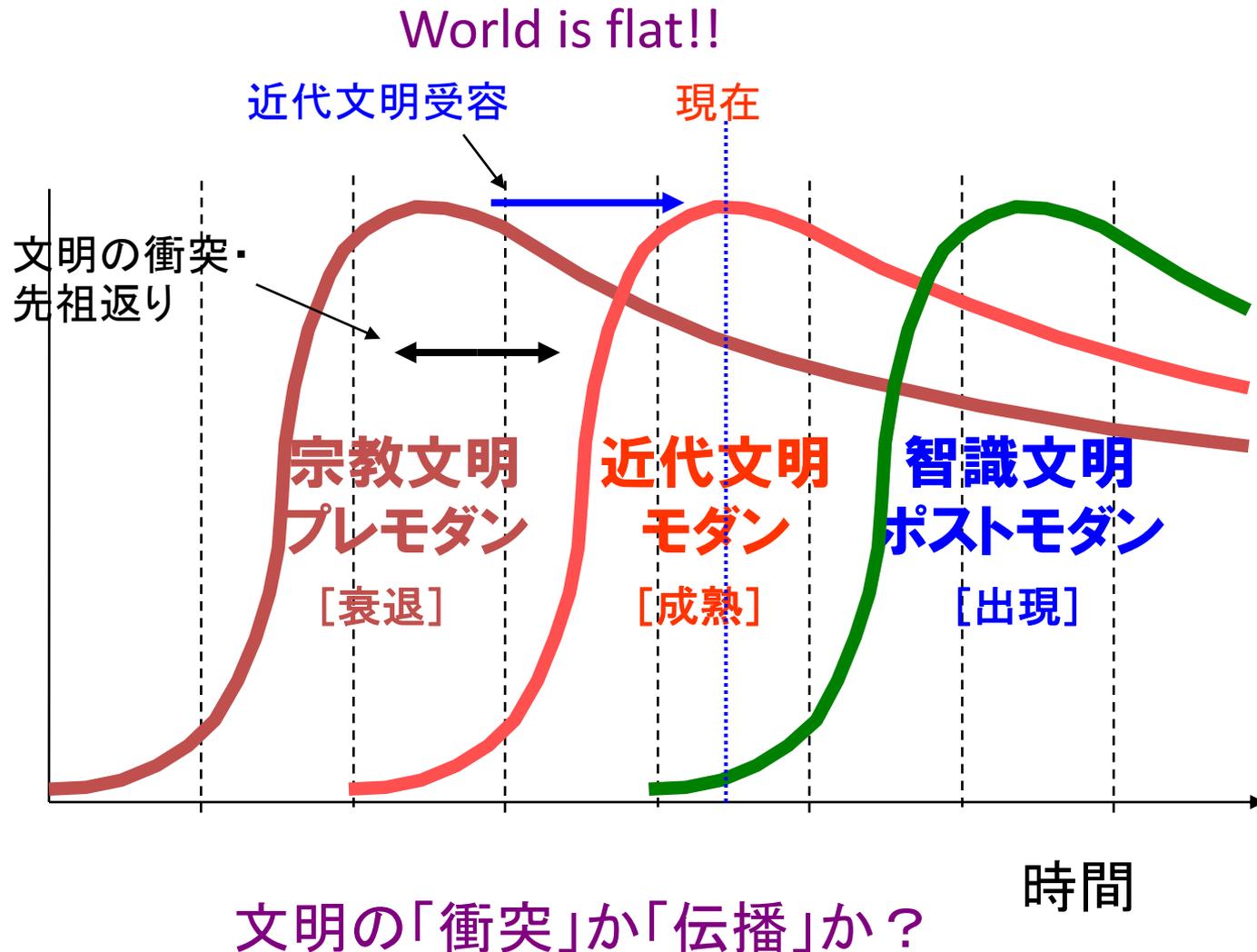
ポリティカル→エコノミック→ソーシャル



近代化の三局面の同質性と差異性

- 近代化を貫く赤い糸：エンパワーメント＝手段の増進
 - 軍国化：戦争(軍事力行使)を通じた国家の自己拡大
 - 産業化：競争(経済力行使)を通じた資本の自己増殖
 - 情報化：共働(知力行使)を通じた智本の自己組織
- 近代文明の伝播にみられる特性
トマス・フリードマン説(フラット化する世界)との比較
 - 国際化：フリードマンのいうG1(国家化と植民地化)
 - 世界化：同じくG2(世界市場化)
 - 地球化：同じくG3(本来のグローバルゼーション)
- 地球化時代の特徴：30億の新資本主義者：BRICs, N11
 - 近代文明の急伝播：開発主義の第二波と共済主義の波
 - 反作用：米国の宗教文明化

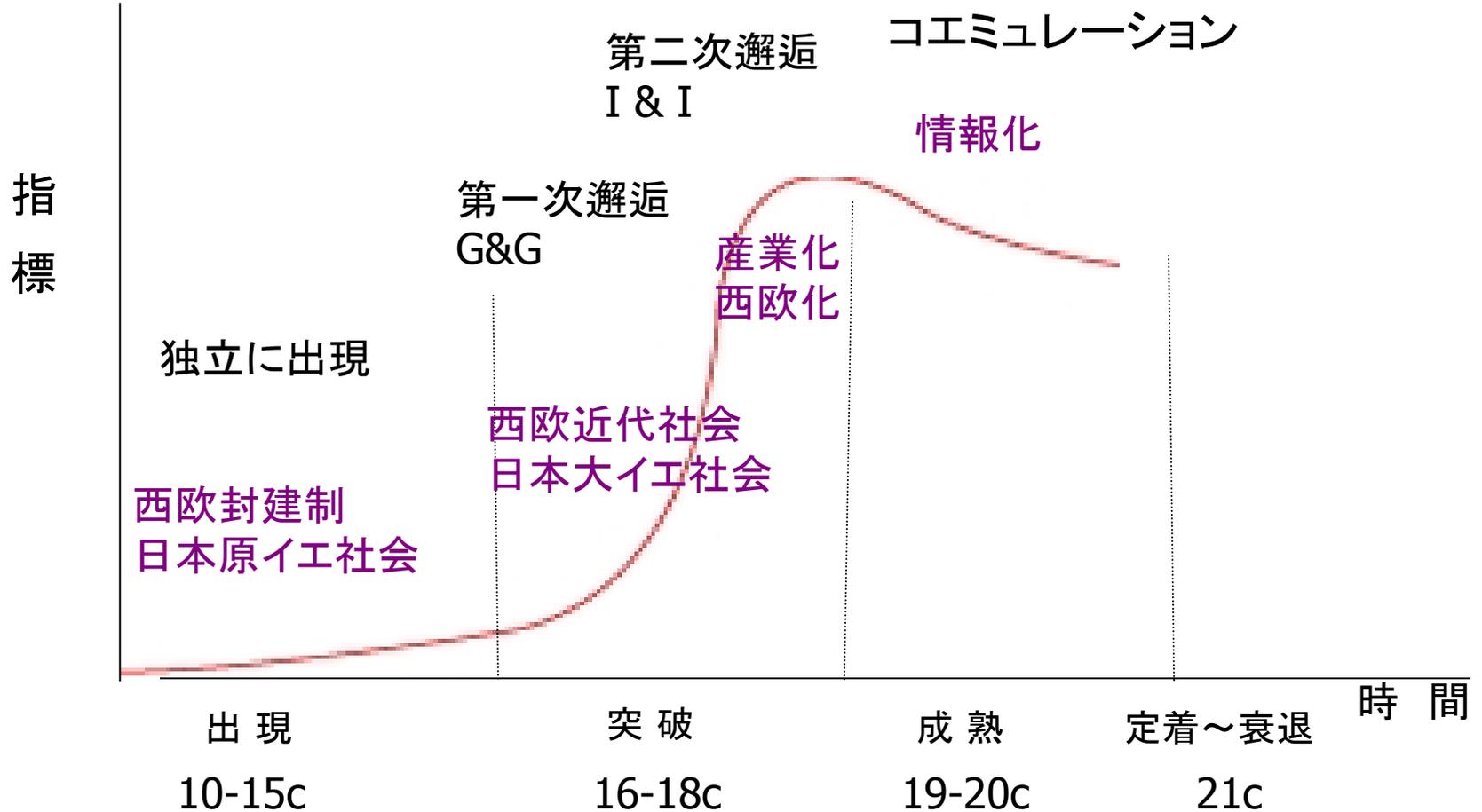
まとめ1: 現代 = 主要三文明の並存と継起



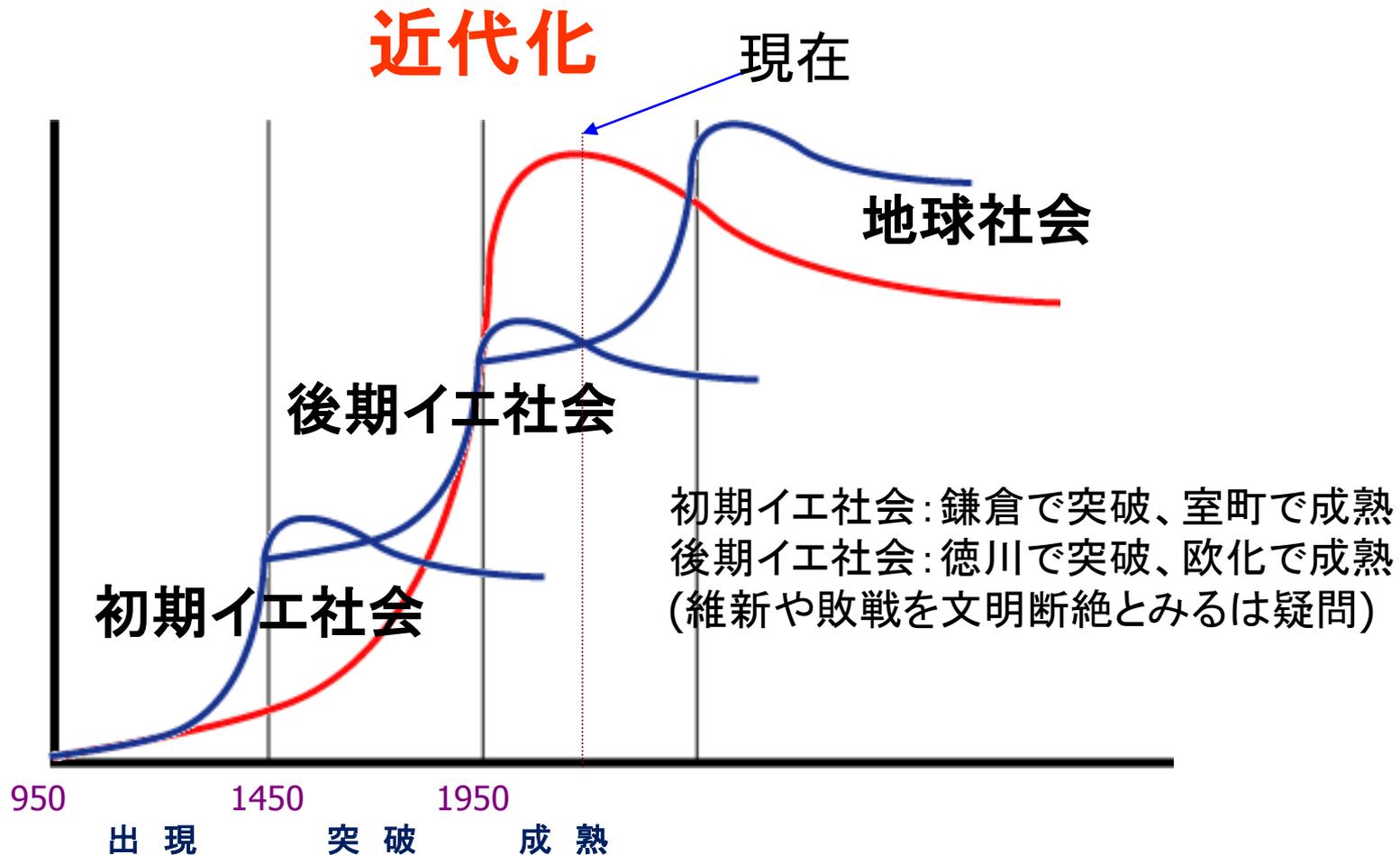
まとめ2: 21世紀の情報文明と文化

- 近代文明・文化はまだ終わらない
→ **ハイパー近代**へ: 発展と成熟
- 近代第三の進化局面が始まる
→ **情報化、情報文明**へ (**第一次情報革命**)
- 第二の進化局面もさらに発展する
→ 産業文明の中での **第三次産業革命**へ
- 第一の進化局面も終わっていない
→ 軍事文明のグローバル「**帝国**」／**テロ化**

日欧の並行的近代化



広義の近代化：日本「イエ」社会



日本の広義の近代化過程

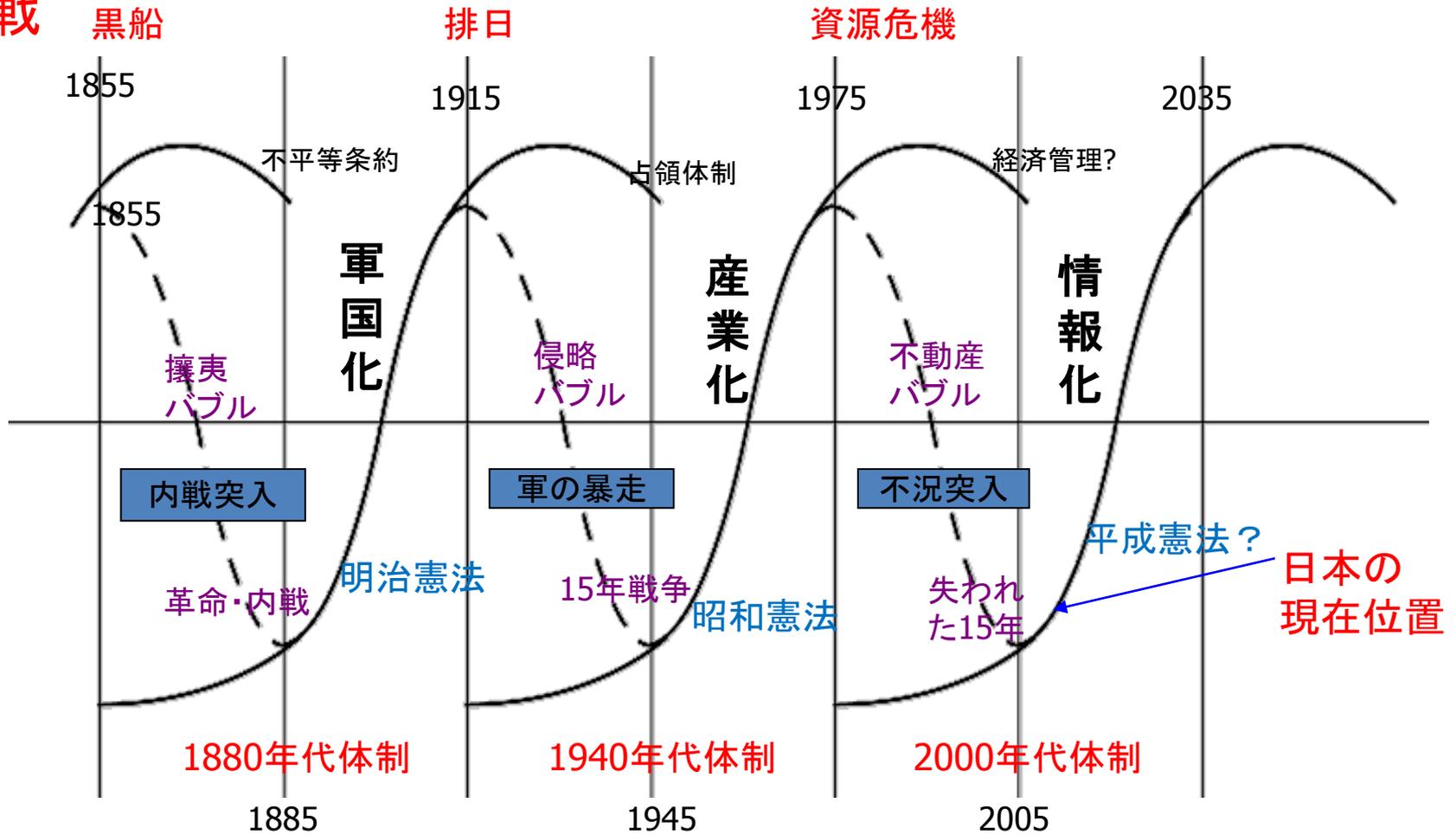
- 出現局面は10－14世紀: 東国武士団の初期原イエ→「関東御分国」
- 突破局面は15-20世紀: 中部の後期原イエ→領国→徳川連合国家
 - 突破の出現: 15-16世紀: 農民の武士化: 惣村から領国への「下克上」: 地域国家化、戦国化
 - 突破の突破: 17－18世紀: 地域的主権国家(領国)の連合国家: 天下布武、勤勉・能力主義革命
 - 突破の成熟: 19-20世紀: 西欧化へ
 - 開発主義的西欧化に驀進: 主権国家化と産業化
- 成熟局面は21世紀: グローバル化、情報化へ
 - 再び地域が中核に: 地域情報化→ネット化→日本連邦?
 - 日本的文化要素の優位: 共働・調和の重視、環境との共生
 - 東西近代文明の「融合」とポストモダン文明の準備

90年S字波の過去への延長：社会変化の波

- 1435－1465－1495－1525：近国在地領主勢力の台頭
- 1495－1525－1555－1585：戦国時代の始まり
- 1555－1585－1615－1645：天下一統(信長・家康)
- 1615－1645－1675－1705：統治機構確立(家綱十一門)
- 1675－1705－1735－1765：農業(吉宗)：「勤勉革命」
- 1735－1765－1795－1825：商業(田沼)
- 1795－1825－1855－1885：攘夷、初期産業化
- 1855－1885－1915－1945：国家化
- 1915－1945－1975－2005：産業化
- 1975－2005－2035－2065：情報化

日本の西欧化過程：60年周期説

挑
戦



対
応

パラダイム転換と旧勢力の衰亡

60年長波の構成要素

- 意識の60年と制度の60年
- 上昇と下降の30年
- 水面上の30年と水面下の30年
- 山(環境変化)の10年、
谷(制度変化)の10年
- 浮上の10年と沈下の10年
- 四つの15年期:文化、混乱、政治、経済

近代日本の政治システム

30年周期の政治運動と新勢力の“取り込み”

政治運動 ⇒ 新政治体制

- 尊皇攘夷(60-65)⇒薩長連合(1866)
- 自由民権(80)⇒藩閥・民党連携(1896)
- 護憲・普選(10)⇒民党大連合(1925)
- 新体制(40)⇒優越政党制(1955)
- 住民・革新自治体(70)⇒連立体制(1983)
- ネティズン(00)⇒？

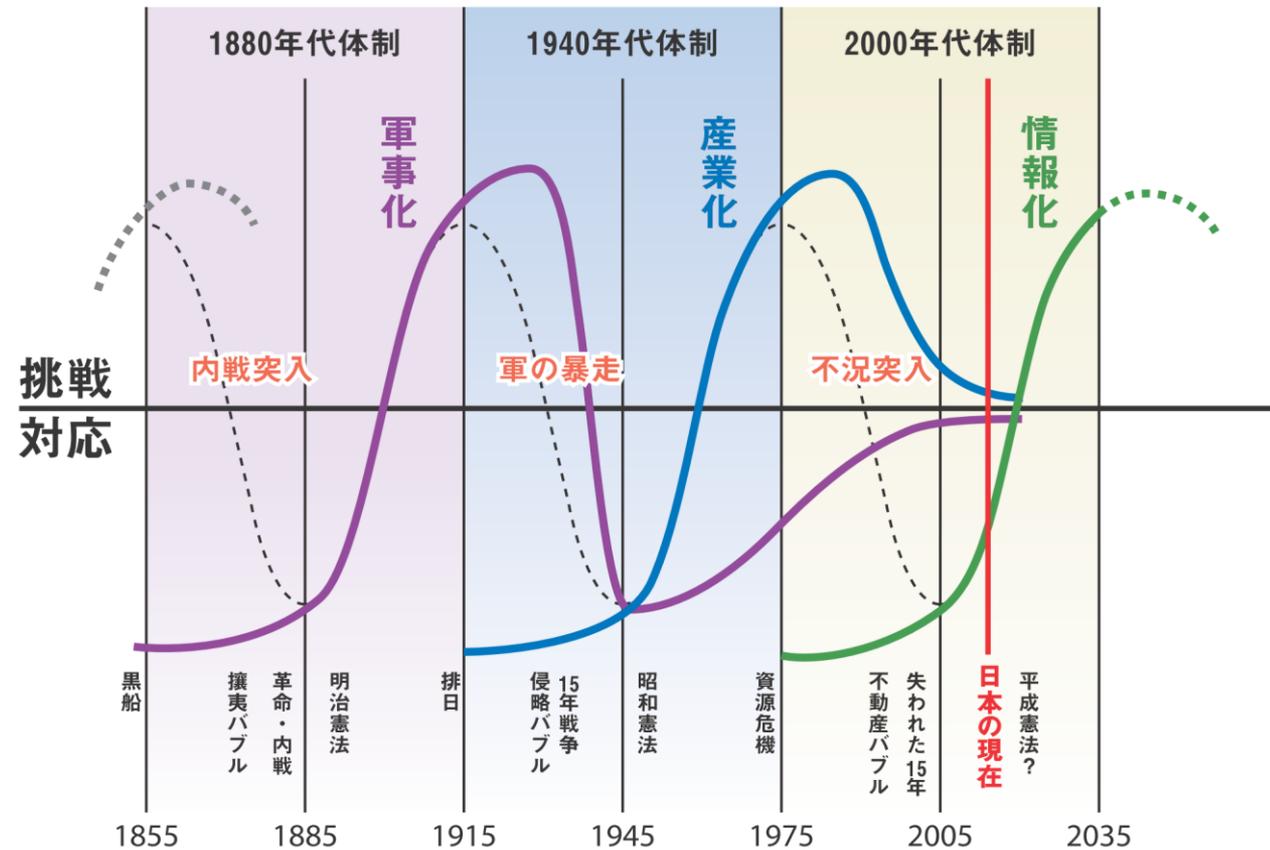
日本の発展目標と戦略

	第一期 1855-1945	第二期 1915-2005	第三期 1975-2065
国内目標	文明開化	民主主義	地域化
国際目標	列強化	平和主義	地球化
発展戦略	富国強兵	経済発展	情報化

田中角栄(戦後民主・社会主義)
の負の遺産からの脱却

宴の後：下降過程

日本の西欧化過程：60年周期説



日本の現在位置(1)

- 軍事は属国状態の再確認：敗戦と占領：失われた65年
 - 民主党の蹉跌：沖縄と原発事故対応
 - それでも世界第6位の軍事大国(2010年：米中仏英露)、ただし核は放棄
 - 一人当たり国防支出は第20位、対GDP比では世界最低。

日本の現在位置(2)

- 経済は90年がバブルの絶頂。以下下降
 - 失われた10－15－20年と長引く一方：“日本病”
 - それでも世界第3位の経済大国、ただし自信は喪失
 - 一人当たりGDPは第22位(60年代に戻る)
- しかし世界第一位のソーシャル大国(文化大国)?
 - 平和・安全・清潔・長寿、衣食の豊かさ。膨大な“都市資源”
 - 村上:若い人達による「市民社会」/共同体探しが始まっている。エコや地域主権といったキーワードに触れて集まってくる人の流れ
 - [公文:必要なのは、智業＝智民社会の大きな物語]
 - 東:規律・訓練型権力から環境管理型権力へ
 - 説得・誘導型の温情主義とmotivation 3.0

現行「硬性」憲法の問題点

- 最高裁が「統治行為」論の名目で、9条問題をめぐ
る違憲立法審査権を不行使
- 内閣法制局の憲法解釈の限界
 - 集団的自衛権の不行使解釈
- 内閣法に残る明治憲法の残滓
 - 総理大臣のリーダーシップのなさ
- 強すぎる参院の権限と厳しすぎる憲法改正条項
- 形骸化している国民主権：国民投票と審査

真のイシューと虚のイシュー

- 戦後民主主義の堅持か「ふつうの国」か
 - 戦後民主主義の二面性
 - 半国家と共働国家
- 戦後社会主義の堅持か「グローバル化」・「構造改革」か
 - 戦後社会主義の二面性
 - 開発主義と福祉国家
- 真の中心的イシューは情報化に対してとる態度
 - 著作権、連邦国家、共働主義...

現代をみる複眼的視点：文明内競争

- 国家化：超国家化(ポスト威のゲーム)、
新開発主義、共発主義
- 産業化：機械化＋商品化
 - － 新主導産業：第三次産業革命の突破局面で出現
 - それはどんな産業か？どこでだれがそれを主導するのか？
 - － ユビキタス化：第三次産業革命の出現局面の成熟
 - － 郊外化：第二次産業革命の成熟局面の成熟
 - － ケータイ(究極の家・個電)：第二次産業革命の突破局面の定着
- 情報化：コンピューター化＋通識化
 - － 第一次情報革命もいよいよ突破局面へ：智のゲーム
 - － CGM,UGC、ウェブ2.0、オープン化→通識と智本

現代世界の四つの基本問題

現代世界は**文明内競争**へ

① 国家化は**ポスト威のゲーム**へ

① 開発主義第二波と共済主義第一波

② 産業化は**第三次産業革命の突破**へ

③ 情報化は**第一次情報革命の突破**へ

情報化の近未来

- 第一次情報革命の「突破」: 智民革命?
 - 「智民」の台頭から「智業」による智のゲームへ
 - 巨大な「通識ベース」と「ウェブ・サービス」のクラウド構築が中核となる
 - 独占化(グーグル)と共働(オープン化)の共存
- E2Eから、エッジの一部の異常肥大へ
 - 「パイプ」対「データ(通識)」の競争
 - パイプ→知財 か、データ→パイプ か?

21世紀地球社会の基本課題

(1):近代化支援

- 国家・超国家的機関の役割は大
 - 共発援助:産業化の推進とデジタル・デバイド解消
 - 智のゲームのための新ルール:情報権関連の
- 企業による支援も重要
 - 情報化のための基本インフラ
 - 情報化のための各種のプラットフォーム
 - 知識ベースと収入機会

21世紀地球社会の基本課題

(2): 暴発の抑制

- 核拡散とテロリズム対策
- 環境・資源保全
 - 物的環境: 温暖化と人口爆発
 - 心的環境: 精神衛生
- 健康面: 近代の三つの病気
 - 国家化局面: 伝染病(ペスト、赤痢、天然痘...)
 - 産業化局面: ストレス病(胃潰瘍、心身症等)
 - 情報化局面: 精神病

21世紀地球社会の基本課題

(3): 中庸・バランスの維持

- 監視と自己情報保護の間
- 通識化と知財権保護の間
- 集中(グーグルゾン)と分散(P2P)の間
- 規制と競争の間